

他人の手

布宮慈子^{やすこ}

病院の床の上^へかなし人の世の生^{しやうらうびやうし}老病死^なここにある

もうだれも来なくていいから 母と吾^あの時間のなかに雪が降り積む

面談に「足、なんぼでも上がるよ」と母は言ひたり施設のひとへ

「川」でない、わたしは「宮」と名を正し皆を笑はす母すこしハイ

人の手はありがたきかなひらひらと母を世話する他人^{ひと}の手やさし

身体はどこかに穴があいてゐて起き上がれない 敗北に似て

雪のふる午後に漕ぎだすエアロバイクひとつのおこなひ涙ぐましも

こんな日がわれに来るとは耳元に生日祝ふ幼の声よ

極寒に生まれしわれは幼子のおめでたう受く祖母^{ばば}と呼ばれて

なんさい？ ときみがきくから答へたり四つのきみはひつくり返つた